



Title	日本語と韓国語における人称詞の使用実態：アンケート調査の分析結果から見る頻度差と用法の相違
Author(s)	鄭, 惠先
Citation	計量国語学, 23(7), 333-346
Issue Date	2005
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/43786
Type	journal article
File Information	keiryo.pdf



1. はじめに

従来、日本語と韓国語の対照研究は様々な側面で行われてきた。しかし、「わたし」「あなた」、「お父さん」「課長」などの人称詞についての対照研究は、皆無といっても過言ではない。これは、英語などとの対照に比べて、韓国語との対照では日本語人称詞の特徴が表面に表れにくいからだと考えられる。鈴木孝夫(1973)や田窪行則(1997)などでも述べられているように、日本語では、西欧言語での人称代名詞とは違って、名前や職位名、親族名などを用いて人を指す場合が多い。このような表面的な日本語人称詞の特徴は、おおむね韓国語人称詞でもいえることである。

しかしながら、日本語と韓国語で書かれた小説の対訳資料を観察してみると、両言語版での人称詞の出現数にはかなりの差があることに気づく。同一小説の同じ箇所でも、日本語版では人称詞を明示しないが、韓国語版では人称詞を明示するという例が多く、(1)はその一例である。(韓国語部分はローマ字で表記しているが、発音記号をまったく用いていないため、正確な発音の表記とはいえないことを予め断っておきたい。)

(1)a どうか助けてください。 [アボジ]

b zou zom dowazuseyo. (私をどうか助けてください) [abozi]

本稿では、このような日本語と韓国語での人称詞使用における相違点に焦点を当て、日本語母語話者と韓国語母語話者に対するアンケート調査を行った。この調査の目的は、両言語での人称詞の使用実態を考察し、その頻度差と用法の相違を明らかにすることである。

2. 調査の概要

2.1 調査の目的

鄭惠先(2002)で小説の対訳資料を分析した結果、日本語版小説により韓国語版小説のほうが人称詞の出現率が高いことが明らかになった。さらに、この分析結果により、両言語での人称詞使用の頻度差にかかわる6つの仮説が提示された。本稿では、この仮説にもとづき、日本と韓国で同時にアンケート調査を行い、これらの仮説が両言語での人称詞の使用実態に符合しているかどうかを検証していく。

まず、韓国語人称詞の高い使用率に影響する文形式に関する仮説として、(1)～(3)をあげる。

- (1) 名乗り文では、日本語より韓国語のほうが自称詞が頻繁に用いられる。
- (2) 勧誘文では、日本語より韓国語のほうが複数形自称詞が頻繁に用いられる。
- (3) 人称詞が連体修飾語として使われる文では、日本語より韓国語のほうが複数形自称詞が頻繁に用いられる。

つぎに、日本語と韓国語の間で人称詞の頻度差を生み出す要因に関する仮説として、(4)～(6)をあげる。

- (4) 日本語では授受表現が頻繁に用いられ、文の表面に動作主を明示しなくても、これらの表現が動作の方向性を明確にする役割を果たす。
- (5) 韓国語で勧誘語尾としてよく用いられる「～a/o yo」は、他の意味を持つ文末語尾としても使われるため、文頭に表れる複数形自称詞は、当の発話が勧誘文であることを示す重要な目印になる。
- (6) 韓国語で連体修飾語として用いられる複数形自称詞は、実際は単数であるべき箇所でも違和感なく使われる。さらに、抱合的視点の用法を持ち、聞き手との距離感を縮める役割を果たす場合がある。

以上の人称詞の頻度差と用法にかかわる6つの仮説をもとに、つぎのようなアンケート

調査を行った。

2.2 調査の方法

- 1) 調査期間：2001年10月～11月
- 2) 調査対象：日本語母語話者350人と韓国語母語話者350人の合計700人。年代別と男女別に詳しく分けてみると、表1のとおりである。インフォーマントの年齢層は中学生以上に限定し、29才以下を若年層、30才～49才を中年層、50才以上を高年層としてまとめた。

表1 年代・男女別インフォーマントの人数 ()の中は% (以下同様)

		若年層	中年層	高年層	合計
日本	男性	78	37	12	127(36.3)
	女性	156	55	12	223(63.7)
	合計	234(66.8)	92(26.3)	24(6.9)	350(100.0)
韓国	男性	58	44	9	111(31.7)
	女性	175	58	6	239(68.3)
	合計	233(66.6)	102(29.1)	15(4.3)	350(100.0)

- 3) 調査地域：日本語母語話者に対する調査は、東京を中心とした関東地域と大阪を中心とした関西地域で行われた。一方、韓国語母語話者に対する調査は、ソウルを中心とした京畿道地域と江陵を中心とした江原道地域で行われた。また、韓国語母語話者の場合、日本語学習歴がないか2年以下であること、なお、日本に長期滞在の経験がないことを条件とした。

3. 分析の結果

3.1 授受表現の使用と人称詞の使用頻度との関係

授受表現が韓国語に比べ日本語のほうでより頻繁に使われるということは、井出里咲子・任榮哲(2001)などの先行研究の中でも述べられてきた。例(2)は、両言語で書かれた同じ小説の同一箇所での会話文を比較したものである。

(2)a わかつてくれるだろ。 [シュリ]

b na ihehalsuizzi? (俺のこと, 理解できるだらう。) [shiri]

(2)aのように、日本語では授受表現が多用され、これらが明確な方向性を示しているため、文の表面に与え手か受け手を明示しなくても推論が容易である。一方、韓国語では日本語に比べ授受表現の使用が少ない。さらに、韓国語の授受表現には日本語のような「(～て)あげる／(～て)くれる」の区別がなく、ともに「(～a/o) zuda」という1つのことばでしか表せないため、授受表現を用いるとしてもそれだけでは方向性が明確でない。

このように、韓国語とは異なる日本語の授受表現の構造と、これらの多用による方向性の明確さが、両言語での人称詞の頻度差に影響する1つの要因になっていると考えられる。このような、日本語での指示対象への推論の容易さについては、平川八尋(1989)や渡辺文生(2001)などの先行研究の中でも言及されている。

この仮説に関連して今回のアンケートで提示した質問項目は、以下の場面1と場面2である。韓国語版アンケートの内容は基本的に日本語版と同じであるため、ここでは日本語版アンケートのみを示す。

【場面1】 あなたの留守中に友人の鈴木さんから電話があったというメモがありました。鈴木さんに電話をかけて確認するとき、あなたはどのような言い方をしますか。

1. わたしに電話した？(わたしの他にあたし、ぼく、おれなどを使っても結構です。ー以下同様)
2. 電話した？
3. わたしに電話くれた？
4. 電話くれた？

【場面2】 一人暮らしをしている友人の鈴木さんから、先週引っ越しをしたという話を聞きました。そのとき、手伝いに行けなかったことを残念に思ったあなたはどのような言い方をしますか。

1. どうしてわたし呼ばなかったの？
2. どうして呼ばなかったの？
3. どうしてわたし呼んでくれなかったの？
4. どうして呼んでくれなかったの？

場面1では「名詞+くれる」の形式、場面2では「動詞+てくれる」の形式を提示している。両場面ともに1と2が「非授受表現の文」、3と4が「授受表現の文」であり、この中で1と3が「自称詞を明示する文」、2と4が「自称詞を明示しない文」である。こ

これらの分析結果を表2に示す。

表2 日本語母語話者と韓国語母語話者の授受表現使用と人称詞使用頻度との関係

		1	2	3	4	合計
場面1	日本	38(10.9)	66(18.9)	85(24.3)	161(46.0)	350(100.0)
	韓国	220(62.9)	126(36.0)	3(0.9)	1(0.3)	350(100.0)
場面2	日本	28(8.0)	40(11.4)	65(19.1)	215(61.4)	350(100.0)
	韓国	227(64.9)	102(29.1)	15(4.3)	6(1.7)	350(100.0)

場面1と場面2ともに、日本語母語話者の最頻値は4の「自称詞を明示しない授受表現の文」、韓国語母語話者の最頻値は1の「自称詞を明示する非授受表現の文」である。両言語間で正反対の結果となっており、この結果は両場面ともに、 χ^2 検定により0.1%水準で有意差が認められた(場面1： $\chi^2_{(3)}=381.6$, $p<.001$ /場面2： $\chi^2_{(3)}=413.0$, $p<.001$)。以上の結果から、韓国語母語話者より日本語母語話者のほうが授受表現を好むという傾向と、日本語母語話者より韓国語母語話者のほうが自称詞の明示を好むという2つの傾向が明らかになった。

また、韓国語母語話者の場合、回答が1と2にきわめて偏っていることから、「自称詞を明示する」という条件より、「授受表現を用いない」という条件のほうが優先していることが証明された。

3.2 名乗り文での人称詞の頻度差

名乗り文とは、初対面の人に自己紹介をする場面や、知人への電話で最初に自分であることを知らせる場面、または、誰かに自分の職位などを示す場面での発話のことをいう。鄭惠先(2002)での小説資料の分析結果によれば、このような場面の発話で、韓国語では必ずといっていいほど、自称詞を文頭に持ってくる傾向が見られる。

(3)a あの、パク監督ですが…。 [サイ]

b zo bakkamdogimnida. (わたくし、パク監督です。) [muso]

韓国語文の(3)bでは、むしろ自称詞をつけないと文の座りが悪く、このように文頭に自称詞を明示することが、1つの文形式としてパターン化していると考えられる。一方、日本語の名乗り文では、自称詞を文の表面に明示しない傾向が強い。

ちなみに、(3)bからもわかるように、韓国語の名乗り文で用いられる自称詞には助詞

がつきにくい。よって、ここでの自称詞は主語ではなく、フィラー (filler) 的な要素が強いと考えられる。(3)a の日本語文で自称詞の代わりに「あの」というフィラー的な要素が用いられていることも、この推論を裏付ける一例だといえるであろう。

この仮説に関連して今回のアンケートで提示した質問項目は、以下の場面3である。

【場面3】あなたは友人の鈴木さんの携帯に電話をかけました。呼び出し音の後、鈴木さんが出ました。自分の名前を言うとき、あなたはどのような言い方をしますか。

1. 名前だけど.
2. わたし, 名前だけど.

この分析結果を表3に示す。

表3 日本語母語話者と韓国語母語話者の名乗り文での自称詞の使用頻度

		1	2	合計
場面3	日本	319(91.9)	31(8.9)	350(100.0)
	韓国	96(27.7)	250(72.3)	346(100.0)

*韓国語母語話者のデータ分析の際、4個の欠損値が生じた。

日本語母語話者の最頻値は1の「自称詞を明示しない名乗り文」で、韓国語母語話者の最頻値は2の「自称詞を明示する名乗り文」である。表2での結果と同じく、両言語間の差は明確であり、この結果は χ^2 検定により0.1%水準で有意差が認められた($\chi^2_{(1)}=290.5$, $p<.001$)。とりわけ、日本語母語話者のほうの結果では、90%以上の人が1の「自称詞を明示しない名乗り文」を選択しており、韓国語母語話者のほうの結果に比べて偏りがより顕著に見られた。したがって、日本語では、韓国語の傾向とはまったく反対に、名乗り文では自称詞を明示しないということが、1つの文形式としてパターン化していると考えられる。

3.3 勧誘文での人称詞の頻度差

韓国語の勧誘文では、複数形自称詞「uri」が多く用いられる。これは、日本語の勧誘文では見られない傾向であり、この違いが、両言語での人称詞の頻度差に大きく影響していると考えられる。例(4)は小説資料からの引用である。

(4)a さあ、出ましよう。 [アボジ]

b uri nagayo. (私たち, 出ましよう.) [abozi]

韓国語の勧誘文で複数形自称詞が多用される原因として、文末語尾「～a/o yo」と「～(u)lka?」の意味の多様性を取り上げることができる。「～a/o yo」は勧誘文だけではなく平叙文や命令文、疑問文などにも対応し、「～(u)lka?」は推量文にも対応している。よって、これらの語尾が使われた文の頭に複数形自称詞を据えることは、当の発話が勧誘文であることを示す有効な目印になるのである。

この仮説に関連して今回のアンケートで提示した質問項目は、以下の場面4である。場面4では、日本語版と韓国語版の間に、提示した例の種類に差があるので、ここでは例を両言語別に示す。

【場面4】知人の山田さんに会ったあなたは、お腹が空いてきたので山田さんを食事に誘います。そのとき、あなたはどのような言い方をしますか。

《日本語版で提示した例》

1. ご飯食べに行きましょう。
2. わたしたち，ご飯食べに行きましょう。（わたしたちの他にあたしたち，ぼくら，ぼくたち，おれら，おれたちなどを使っても結構です。）

《韓国語版で提示した例》

1. bammogurog^{ayo}. (ご飯食べに行きましょう.)
2. uri, bammogurog^{ayo}. (わたしたち, ご飯食べに行きましょう.)
3. bammogurog^{apsida}. (ご飯食べに行きましょう.)
4. uri, bammogurog^{apsida}. (わたしたち, ご飯食べに行きましょう.)

*例の中の囲み線と下線, また, ()内の日本語訳は, 便宜上本資料だけにつけたものである。

韓国語版での例の1と2では「～a/o yo」という文末語尾が用いられ, 例の3と4では「～p/up sida」という文末語尾が用いられている。これは, 韓国語内で勧誘語尾の種類と複数形自称詞の使用頻度との関係を考察するためである。したがって, 日本語版との対照分析では, ともに複数形自称詞を明示しない1と3をまとめて日本語版の1にあわせ, ともに複数形自称詞を明示する2と4をまとめて日本語版の2にあわせて分析を行った。その分析結果を表4に示す。

表4 日本語母語話者と韓国語母語話者の勧誘文での複数形自称詞の使用頻度

		1	2	合計
面	日本	348(99.4)	2(0.6)	350(100.0)

	韓国	106 (30.5)	241 (69.5)	347 (100.0)
--	----	------------	------------	-------------

*韓国語母語話者のデータ分析の際、3個の欠損値が生じた。

日本語母語話者の最頻値は1の「複数形自称詞を明示しない勧誘文」で、韓国語母語話者の最頻値は2の「複数形自称詞を明示する勧誘文」である。表2と表3での結果同様、両言語間の差は明確であり、この結果は χ^2 検定により0.1%水準で有意差が認められた($\chi^2_{(1)}=364.1, p<.001$)。とりわけ、日本語母語話者のほうの結果では、99%以上の人が1と回答しており、勧誘文の頭に複数形自称詞を用いることに対し、大半の人が違和感を持っていることが明らかになった。

3.4 韓国語での勧誘語尾の種類と人称詞の使用頻度との関係

ここでは、表4で明らかになった日本語と韓国語の勧誘文での人称詞の頻度差にもとづき、韓国語の勧誘文に複数形自称詞が多用される要因について、より詳細に考察を進めていく。前述したように、その要因としては、勧誘語尾の意味の多様性があげられる。

韓国語の勧誘文で用いられる文末語尾には、「～za」、「～p/up sida」、「～a/o yo」、「～(u)lka?」などがある。このうち、「～a/o yo」は、勧誘文だけではなく、平叙文や命令文、疑問文にも、「～(u)lka?」は推量文にも対応しており、これらは文脈やイントネーションによって区別される。よって、文頭に明示される複数形自称詞は、勧誘文であることを示す重要な役割をすると考えられる。

上記の場面4の韓国語版で、1と2は複数の文形式に対応する文末語尾「～a/o yo」を用いた例であり、3と4は勧誘文形式のみに対応する文末語尾「～p/up sida」を用いた例である。さらに、1と3は複数形自称詞を明示しており、2と4は複数形自称詞を明示していないという点で共通している。表5は、このような勧誘語尾の違いが複数形自称詞の使用頻度にどうかかわっているのかを示した分析結果である。

表5 韓国語母語話者の勧誘語尾の種類と複数形自称詞の使用頻度との関係

	1	2	3	4	合計
場面4	63 (18.2)	191 (55.0)	43 (12.4)	50 (14.4)	347 (100.0)

*データ分析の際、3個の欠損値が生じた。

文末語尾「～a/o yo」を用いた1と2を合わせた回答率は全体の73.2%であり、文末語尾「～p/up sida」を用いた3と4を合わせた回答率は26.8%である。この結果から、多くの人が勧誘文の中で、勧誘文形式のみに使われる文末語尾「～p/up sida」より、他の

文形式にもよく使われる文末語尾「～a/o yo」のほうを好んで用いていることが明らかになった。

なお、1と2を合わせた254人の回答を100%に換算した場合、複数形自称詞を明示する2のほうを選択した比率は75.2%であり、3と4を合わせた93人の回答を100%に換算した場合、複数形自称詞を明示する4のほうを選択した比率は53.8%である。すなわち、「～p/up sida」を用いた文に比べ、「～a/o yo」を用いた文の中で、より多く複数形自称詞を明示するという傾向が見られた。この結果からわかるように、韓国語の勧誘文で複数形自称詞「uri」を明示するかしないかは、どの勧誘語尾を選択するかと深く関係しており、その要因は勧誘語尾の意味の多様性によるものと推測される。

3.5 連体修飾語として用いられる人称詞の頻度差

韓国語では、家族など自分が所属しているグループを話題にすると、連体修飾語として複数形自称詞を用いることが多い。例(5)は小説資料からの引用である。

(5)a お父さんが帰る前にもとのところに戻しとかなきゃならないんだ。 [英雄]

b uriabozi toraosigizone zezarie gattanoayahe. (僕たちのお父さんが帰られる前にもとのところに戻しとかなきゃならないんだ) [youngung]

このような発話で、日本語では、(5)aのように連体修飾語を明示しないか、あるいは単数形自称詞を用いる場合が多い。しかし、韓国語では、できるだけ連体修飾語を明示し、しかも単数形自称詞より複数形自称詞を用いる場合が多い。

この仮説に関連して今回のアンケートで提示した質問項目は、以下の場面5である。

【場面5】あなたが知人の山田さんと街を歩いているとき、あなたの兄弟に会いました。山田さんに兄弟を紹介するとき、あなたはどのような言い方をしますか。(兄弟がいなくてもいと想定して答えて下さい。)

1. 兄です。(兄の他に姉、弟、妹を使っても結構です。ー以下同様)
2. うち (uri/zohi) の兄です。
3. わたしの兄です。
4. 自分の兄です。

*例2での()内は韓国語版アンケートで提示した形式である。

ただし、例2の場合、韓国語版アンケートでは複数形自称詞を提示しているが、日本語版アンケートでは「うち」を提示している。これは、上記のような場面で、日本語で

は複数形自称詞が連体修飾語として明示されることはあり得ないと判断したからである。よって、このような場面での韓国語の複数形自称詞に、もっとも近接している形式として日本語の「うち」を取り上げて、これに対する日本語母語話者の使用意識を考察したいと考えた。

したがって、1は「自称詞をまったく明示しない文」、2は「韓国語では複数形自称詞、日本語では「うち」を明示する文」、3は「単数形自称詞を明示する文」、4は「「自分(zagi)」を明示する文」となっている。この分析結果を表6に示す。

表6 日本語母語話者と韓国語母語話者の連体修飾語としての複数形自称詞の使用頻度

		1	2	3	4	合計
場面 5	日本	80(22.9)	104(29.7)	162(46.3)	4(1.1)	350(100.0)
	韓国	21(6.0)	208(59.4)	121(34.6)	0(0.0)	350(100.0)

日本語母語話者の最頻値は3の「単数形自称詞を明示する文」で、韓国語母語話者の最頻値は2の「複数形自称詞を明示する文」である。この結果は、 χ^2 検定により0.1%水準で有意差が認められた($\chi^2_{(3)}=79.1, p<.001$)。さらに、日本語母語話者のほうの結果で2という回答が29.7%見られたことから、自分の家族や所属グループを表すとき、日本語では単数形自称詞とともに「うち」という形式も多く用いられるということが明らかになった。ただし、関西の女性の間では「うち」を「わたし」の意味として用いる場合も多く、回答の中には「うち」を単数形自称詞として認識していた例もあったと推測できる。

また、1の「自称詞をまったく明示しない文」の回答率が、日本語母語話者では22.9%あったのに対し、韓国語母語話者では6.0%しかなく、両言語の間に差が見られた。すなわち、状況的に修飾語を判断できる場合、日本語母語話者は韓国語母語話者に比べ、できるだけ連体修飾語を用いない傾向が強い。なお、4の「「自分(zagi)」を明示する文」は日本語母語話者でも回答率が非常に低いが、韓国語母語話者では回答が1例もなく、このような文は不適切であることが確認された。

以上の分析結果から明らかになったように、韓国語母語話者は、もし2人だけの兄弟だとしても「私たちの兄」という表現を用いることがよくある。このように、実際は単数であるべき箇所での複数形自称詞の使用は、日本語では見られない用法である。ここでは、このような韓国語での複数形自称詞の用法に対して、韓国語母語話者の使用意識を考察する。この用法に関連して韓国語版のアンケートで提示した質問項目は、以下の場面7である。これは韓

韓国版アンケートのみでの項目であるが、便宜上、ここでは、その日本語訳を示した。

【場面7】結婚している男性が自分の妻のことを友達に話すとき「僕たちの家内 (urizipsaram)」という。

例) 今日、僕たちの家内は同窓会に出かけてるんだ。

* ()内は、実際の韓国語版アンケートで用いられた韓国語の形式である。

場面7に対する回答は、提示された4段階の容認度レベルから1つを選択する方式で行われた。各容認度レベルの内容は、1. まったく違和感がない、2. それほどの違和感はない、3. 若干違和感がある、4. 非常に違和感がある、の4つである。この分析結果を表7に示す。

表7 韓国語母語話者の単数であるべき箇所での複数形自称詞の使用についての意識

	1	2	3	4	合計
場面7	184(52.6)	144(41.1)	16(4.6)	6(1.7)	350(100.0)

最頻値は1の「まったく違和感がない」であり、1と2を合わせると90%以上の人が「違和感がない」と答えている。すなわち、韓国語で複数形自称詞が連体修飾語として用いられる場合、これらの多くは日本語の「うち」の役割を果たしており、実際は単数であるべき箇所でも違和感なく使われるということが明らかになった。

3.6 複数形自称詞「uri」の抱合的視点の用法

ここでは、韓国語の複数形自称詞「uri」のもう一つの用法について考察する。

まず、小説資料からの引用を見てみよう。

(6)a ハン先生には何を? [アボジ]

b urihansonsengnimunyo? (私たちのハン先生は?) [abozi]

これは、居酒屋の主人が顔見知りの客であるハンさんに「おつまみは何かがいいか」を聞く場面での発話だが、韓国語文の(6)bでは、聞き手を指す人称詞「hansonsengnim (ハン先生)」を複数形自称詞「uri (私たち)」が修飾している。このように、韓国語では自分の家族や所属グループを表す場面でなくても、複数形自称詞「uri」が使われる場合があり、このような場面での複数形自称詞「uri」は、話し手が聞き手との距離をより縮めようとする意図で用いるものと考えられる。これは、英語でいう“paternal we (保護者的な we)”や日本語で子どもに使う対称詞「ぼく」の用法に非常に似ており、田窪行則(1997)では、このような人称詞の用法を「抱合的視点」という用語で説明している。ここでは、このような

複数形自称詞「uri」の用法に対して、韓国語母語話者の使用意識を考察する。

この用法に関連して韓国語版のアンケートで提示した質問項目は、以下の場面6である。ここでは、その日本語訳を示した。

【場面6】 中年女性が仲良くしている近所の子のスジンに向かって「私たちのスジン (urisuzini)」という。

例) 私たちのスジンは本当にかわいいね。

* ()内は、実際の韓国語版アンケートで用いられた韓国語の形式である。

場面6に対する回答は、3.5 での場面7と同じく、4段階の容認度レベルを提示し、その中から1つを選択する方式で行われた。この分析結果を表8に示す。

表8 韓国語母語話者の複数形自称詞の抱合的視点の用法についての意識

	1	2	3	4	合計
場面6	136(39.0)	170(48.7)	35(10.0)	8(2.3)	349(100.0)

* データ分析の際、1個の欠損値が生じた。

最頻値は2の「それほどの違和感はない」で、1と2を合わせると、全体の85%以上の人が「違和感がない」と答えている。

以上の結果からわかるように、韓国語で複数形自称詞が連体修飾語として用いられる場合、その使用範囲は日本語での単数形自称詞や「うち」が連体修飾語として用いられる場合より広く、自分の家族や所属グループでない相手にも親しみを込めて用いられることができる。これは、話し手が聞き手との間に距離感をなくそうとする意図から生まれた、抱合的視点の用法だと考えられる。

4. 終わりに

以上、日本語と韓国語の人称詞について、頻度差にかかわると考えられる6つの仮説をもとに、アンケート調査の分析を行った。その結果、つぎの6点が明らかになった。

まず、韓国語人称詞の高い使用率に関係する文形式の条件として、

- (1) 日本語母語話者より韓国語母語話者のほうが、名乗り文の文頭に自称詞を明示する傾向が強い。
- (2) 日本語母語話者より韓国語母語話者のほうが、勧誘文の文頭に複数形自称詞を明示する傾向が強い。
- (3) 日本語母語話者より韓国語母語話者のほうが、複数形自称詞を連体修飾語として

用いる傾向が強い。

つぎに、日本語と韓国語の間での人称詞の頻度差にかかわる要因として、

(4) 日本語母語話者の場合、韓国語母語話者に比べ授受表現を多く用いる傾向が見られ、このような文の中ではできるだけ人称詞を明示しない傾向が強い。

(5) 韓国語母語話者の場合、勧誘文に文末語尾「～a/o yo」を多く用いる傾向が見られ、このような文の中ではできるだけ複数形自称詞を明示する傾向が強い。

(6) 韓国語母語話者の場合、単数であるべき箇所や、自分の家族や所属グループでない相手にも、違和感なく複数形自称詞を連体修飾語として用いる傾向が強い。

今回の考察では、両言語での性差・年代差については詳しく述べていないが、以上の項目には性別と年代も少なからず影響していると考えられる。本調査では、できる限り両国のインフォーマントの性別と年代の割合をあわせることで、調査結果への性差・年代差の影響を防いでいるが、今後、両言語を切り離れた上で、上記の項目に性別や年代などの要素がどのようにかかわっているかについて、より詳細な考察を続けていきたいと考える。

参考文献

- 井出里咲子・任榮哲(2001)人と人とを繋ぐもの—なぜ日本語に授受表現が多いのか、『言語』30-5 pp. 42-45
- 鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』岩波書店
- 田窪行則(1997)日本語の人称表現, 田窪行則(編)『視点と言語行動』pp. 13-44 くろしお出版.
- 鄭惠先(2002)日本語と韓国語の人称詞の使用頻度—対訳資料から見た頻度差とその要因—, 『日本語教育』114 pp. 30-39 日本語教育学会
- 平川八尋(1989)主題省略の再生メカニズムにおける日本人と外国人日本語学習者の相違, 『日本語と日本文学』11 pp. 左1-左8 筑波大学国語国文学会
- 渡辺文生(2001)日本語の談話におけるゼロ形式の指示対象について, 中右実教授還暦記念論文集編集委員会(編)『意味と形のインターフェース 下巻』pp. 847-857 くろしお出版

例文資料

I mun-youl 『uridule ilgurozin youngung』 minumsa 1992

I mun-youl 藤本敏和訳 『われらの歪んだ英雄』 情報センター出版局 1992
Kim jung-hyun 『abozi』 munidang 1996
Kim jung-hyun 田嶋きよ子 他訳 『アボジ』 双葉社 1998
Kong ji-young 『musoepulchorom honzasogara』 purunsup 1998
Kong ji-young 石坂浩一訳 『サイの角のようにひとりで行け』 新幹社 1998
Jung suk-wa 『shiri』 hankukchulpanhyuptongzohap 1999
Jung suk-wa 金重明訳 『シュリ』 文春文庫 1999

(下線部は略記)